

序

—— 渋沢栄一、国際主義者にして愛国者

三浦信孝

本書は二〇二四年三月七日と八日の二日間、東京恵比寿の日仏会館ホールで開かれた日仏会館創立百周年記念シンポジウム「渋沢栄一とフランス」での報告をもとにした記録論文集である。渋沢栄一の最初の渡欧が一八六七年のパリ万国博覧会の折であることはよく知られているが、五百社近い民間企業を起こし、約六百の教育や医療・福祉の社会公共事業に関わった晩年の渋沢が、日仏会館の創立者でもあることを知る人は少ない。

本書の元になったシンポジウム初日が三月七日に設定されたのは、今から百年前の一九二四年三月七日に日仏会館が財団法人としての設立が認可された記念日にあたるからで、本シンポジウムは二年以上前から、日仏会館創立百周年記念行事の一つとして企画され準備された。

しかし日仏会館という組織をご理解いただく上で重要なことは、日仏会館は日本の公益財団法人で、設立当初から一九九五年に御茶ノ水から恵比寿に移転するまでは、長期・短期で来日するフランスの学者・研究者に宿舎を提供し、日仏共同で文化交流事業を推進してきたことであり、二〇二三年から二四年にかけて行われた数ある百周年記念行事のなかで、このシンポジウムは「公益財団法人日仏会館」と会館内に拠点を置く「フランス国立

日本研究所」との共催で行われた唯一の記念行事であることである。

日仏会館 (Maison franco-japonaise) は一九二四年に「日本資本主義の父」渋沢栄一 (一八四〇—一九三二) と「詩人大使」ポール・クロードル (一八六八—一九五五) の協力によって設立されたことになっている。その設立目的は、同年一月に十八人の設立委員が名前を連ねた「日仏会館設立趣意書」にあるように、フランスから一流の学者を招いて先進的の學術文化を日本に紹介し、合わせてフランスの若手日本研究者を受け入れて育成し、學術文化の人的交流をはかり、ひいてはフランス語を通して日本文化の対外発信に寄与することであった。設立当初から相互的な日仏協力がうたわれ、*le japonisme* が合言葉だったが、それが実現されるにはかなりの時間を要した。このことは、一九六六年に創設された「クロードル賞」がフランス語の文学や人文書の翻訳に与えられる翻訳賞だったのに対し、会館創立六十周年にあたる一九八四年に創設された「渋沢・クロードル賞」が、日仏それぞれ相手の文化の優れた研究成果に贈られる學術賞に衣替えして現在に至っていることにも表れている。

それでは、なぜ今回のシンポジウムが「渋沢栄一とフランス」をテーマにしたかと言えば、ポール・クロードルと日仏会館に関しては、一九六八年に日仏会館の雑誌『日仏文化』二三号がクロードル生誕百年記念号にあてられ、二〇〇五年には没後五十年、二〇一八年には生誕百五十年の国際シンポジウムが開かれ立派な論文集が出ているのに対し、渋沢栄一と日仏会館の関係には十分光があてられてこなかったという暗黙の反省があったからだと思われる。

もちろん会館創立八十周年記念出版『近代日本と仏蘭西——10人のフランス体験』(大修館書店、二〇〇四年)には、巻頭にフランス文学者・鹿島茂の充実した講演「渋沢栄一 日本版サン・シモン主義者」を掲載しているし、二〇一一年には同氏の二巻本の評伝『渋沢栄一』(文藝春秋)が完成した機会に再び「渋沢栄一とサン・シモン主義」について講演してもらっている。「民間外交のパイオニア 渋沢栄一の国民外交」(藤原書店、二〇一三年)の著者・片桐康夫氏には刊行の翌年に「渋沢栄一の対外態度——フランスとのかかわりを中心に」と題して講演して

いただいた。他方、二〇一〇年にはシンポジウム「渋沢栄一とアルベル・カーン——日仏実業家の交流と社会貢献」が、二〇一七年には渋沢の渡仏百五十年記念シンポジウム「一八六七年パリ万国博覧会と幕末日本」が日仏会館ホールで開かれ、それぞれ報告書が出ている。しかし、これらはいずれも北区飛鳥山にある渋沢史料館で企画展を開いた渋沢栄一記念財団の主催で行われたもので、日仏会館は会場をお貸しして協力したにすぎない。そこで会館創立百周年にあたる二〇二四年には、福沢諭吉に代わって渋沢栄一が新一万円札の顔になることが予告されていたこともあり、その機会をとらえ会館の創立理事長である「渋沢栄一とフランス」に焦点をあてたシンポジウムを日仏会館の主催で企画することにしたのである。

一 日仏会館の創立理事長・渋沢栄一

事実、日仏会館は一九〇九年に設立された日仏友好団体「日仏協会 (Société franco-japonaise)」を母体として、一九二三年九月一日の関東大震災の災禍にもかかわらず、その半年後の一九二四年三月七日に当時の文部大臣から「渋沢栄一子爵ほか二名」に「財団法人日仏会館の設立が民法第三四条により許可」されている。ほか二名というのは、いずれも明治初年にフランスに留学した工学博士の古市公威（こゝい）男爵と法学博士の富井政章（とみい）（二六年に男爵）で、二人とも後の東京帝大の学長ないし学部長経験者だが、当時は枢密顧問官（4）だった。男爵や子爵といった爵位は、華族制が廃止されて久しい現代に生きる我々には煩わしく感じられるが、百年前の歴史的文脈において日仏会館の誕生を位置づける上であえて記載する。世襲制の爵位は三井・三菱（岩崎家）でも実業家は男爵どまりと決まっていたが、渋沢だけは例外で一九二〇年に子爵に昇格（5）（陸爵）した。

古市公威（一八五四―一九三四）は姫路藩の貢進生として大学南校でフランス語を学び、明治八年に文部省の最初の留学生として渡仏、フランス革命期にできたエンジニア養成の名門校エコール・サントラルとパリ大学理学